

# 参加隊員より一言

隊長から一言

隊長: 中村 雅則さん



所属・役職: 日本IBM 環境-AP環境管理次長

ニックネーム: 隊長

一言: フィリピンの有名な映画俳優に似ているとマデに言われた。

オイスカ四国研修センター職員・ボランティア・研修生から本人へのコメント

- 1週間お疲れ様でした。
- 熱いハートを持っている人だなあと思いました。研修生をみる目が優しくかった。
- おとなしい人ですね。でも、どうしてヒゲがありますか？日本人はヒゲがありません。
- いろいろな勉強を教えてくれて、どうも有難うございました。
- あなたはいろいろな知識があつて尊敬します。「City Boy」だそうですね。
- 一緒にうどん食べました。有難うございました。
- 環境のクイズ、難しかったです。もっと勉強したかったです。
- 親切な笑顔。
- また飲みたいですね。
- 「ゴルゴ13」なみの落ち着き。
- 研修として来て頂いたのに、こちらが勉強させてもらいました。新しいバージョンの環境クイズをお願いします。
- リーダーとしてこのプログラムを考えてくれて、参加者がいつもと違う体験ができました。私たち研修生も楽しい研修、良い思い出をもって国に帰えることができます。どうも有難うございました。
- 同じグループで良かったです。

まず、このプログラムを暖かく受け入れてくれたオイスカ四国支部、ならびにオイスカ四国研修センターの職員、ボランティア、海外研修生に、この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

第4回目を迎える今年の地球環境貢献特別プログラムは、例年タイで実施していたものを国内の香川県で実施するという初めての試みであり、プログラムを企画する私にとっては、ある意味大きなチャレンジであった。それは、微笑みの国タイに行かずして、国内にて、同様もしくはそれ以上の感動や効果をいかにして参加者に与えられるかというイノベーションを必要とした。タイのオイスカのスタッフ、林野庁の役人(カヤイさん)、いつも訪れるターヤン村の村民たちのフレンドリーで暖かいもてなし、そして、今年プライベートで3度目の訪問となった離れ島の小学校の子供たちの”あの笑顔”、国立公園パドでの電気のないキャンプ生活と約2時間におよぶ川くだりの感動、そして、あのタイ南部料理のおいしさ、こういったすばらしい体験・感動を味わう機会なくして、はたして同等もしくはそれ以上の効果を参加者に与えることができるのだろうか？

あの感動が、あのタイ人の暖かさが、あの子供たちの笑顔が、人の心を動かし、自分の行動を見つめなおすきっかけを与えてくれることを身をもって体験したからだ。しかし、その答えはオイスカ四国研修センターにあった。そこには、海外10ヶ国23名の研修生がいる。宗教・言語の異なる研修生が寝食をともにし、農業や生活改善研修に真剣に取り組んでいる。8月8日から9日にかけて、オイスカ東京本部の吉田さんと香川県に視察を兼ねて出張した。香川県庁・綾上町役場へ出向いて、あいさつと植林および間伐への協力をお願いをしたが、オイスカ四国支部副会長石井さんの役人とのコネクションなくしてあの植林・間伐は実現しなかったといっても過言ではないと思った。石井さんには、植林および間伐を完全にしきっていただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。さて、あの植林地を事前に視察していなかったら・・・と思うとぞっとすることがひとつあります。それは、あの急勾配の斜面を事前に自分の足で登ったからこそ、約30万円かかるといわれた歩道の整備費に”OK”と言えたのだということです。その時は、全く道もなく、木につかまりながら登るしかなかった。これでは、到底登れないと思った。もし、歩道の整備は経費節減のため不要と断っていたら、約130名の参加者の誰かに大きな事故が発生していたのではないかと思ういまおぞっとします。ケガや事故もなく、楽しい植林ができたことは本当に良かったとつくづく思う。その代わり、植林地でのトイレの架設は見送らせていただいたが、これに関する大きな不満も聞いていない。まんのう公園キャンプサイトの視察も実施した。とにかくこの夏一番の暑さというくらい暑い日だったにもかかわらず、お付き合いいただいたオイスカ四国研修センターの小野所長、早川

副所長、に改めて御礼を申し上げます。キャンプ地のコテージは既に予約いっぱいだったので、テントサイトの仮予約とキャンセルポリシーを確認した。夕方、全ての視察を終え研修センターに戻り、あの光景を初めて見た。毎朝、掲揚した国旗を、今度は降ろして、綺麗にたたみ返還するというあの一種異様な光景だ。この短い時間の研修センター視察で確信できたことがいくつかあった。それは、ホテルではなく、この研修センターで海外研修生と寝食をとるにすれば、日本人が忘れがちな礼儀作法、そして規則正しい生活・規律からくるチームワークの大切さ、そして、一番大切な”もったいない精神”を再認識し、素直に受け入れられるのではないかと。この研修生と寝食をとるだけでなく、全ての活動において彼らと同一行動をとるようにプログラムを企画することこそが、冒頭に述べたイノベーションであると。この視察において、小野所長にお願いしたことがいくつかある。それは、最初にセンターでの生活に関するオリエンテーションを実施して欲しいということ。もうひとつは、プログラム参加者と海外研修生を分け隔てなく、同一行動をとるような研修・活動にして欲しいということだった。この要望が見事に成功した。プログラム参加者はグループAとBに分かれ、それぞれのグループには、IBM社員、黒田電気社員、大学生が均等に編成され、そのグループ単位で活動を実施するというものだ。そして、常にオイスカ職員・ボランティア・研修生もグループAおよびBと行動をとる。初日の晩に、みんなの名前(ニックネーム)を覚えるために名札をつくり、研修中は参加者も研修生も常時胸にぶらさげるようにしたが、正直全員の名前を記憶できるとはその時思わなかった。

ところが、毎朝晩の点呼、農業体験、豆腐・うどん作り、掃除、皿洗い、国際交流、里山体験、かりん際、国際フェスタ、西念寺、バーベキューと常に行動をとることで、会話がはずみ、笑い、お互いに興味を持ち、写真をとる中で、お互いの親密度が増し、自然と全員のニックネームが頭に入ってくるようになった。もうひとつ、特筆すべきことがある。それは、四国研修センターに滞在し、海外研修生と同じことをしてはじめて気づくことがいくつかあるということだ。掃除や皿洗い、農業研修を実際に体験しないかぎり、気づかないことがある。それは、徹底的にムダを排除し、廃棄物をつくらない環境配慮がごく当たり前のように行われているということだ。米のとぎ汁は、そのまま流すのではなく、発酵させ、水を浄化するものにかえて排水溝に流し汚染を防いでいた。食卓には、折り込み広告でつくった一時的な生ごみ用ダストボックスがおかれ、卵の殻や野菜の不要な部分等が捨てられるが、これらはコンポスト化されるのである。収穫された野菜は、販売するために不要な部分(長い茎や葉っぱ)を切りそろえて出荷するのだが、その茎や葉っぱは、鶏のえさとして完全利用される。形が悪く販売には適さない野菜(きゅうりやなす)は”つけもの”やセンターでの食材となる。

文字どおり、”ゴミゼロ”のオペレーションが浸透していることに感銘を受けた。数時間の視察・滞在では気づかない様々なことを実際に、寝食・行動をとることで学べるものがたくさんあることに改めて気づいた。

”百聞は一見にしかず”ということわざがあり確かに正しいかもしれないが、”百見は一験(体験)にしかず”というのも真なりと思った。

プログラム参加者のみなさん、私がプログラム初日の開講式で述べたことを記憶してありますか？

それは、センターの規則を守って、とにかく楽しんで下さいということです。その楽しみや喜びが、人の心を動かし、自分の行動を見つめなおし、研修生とのやりとりやセンターでの生活を思いおこすたびに、今後の自分のライフスタイルになんらかの変革をもたらすと確信するからです。

苦勞して、育てた米や野菜は一瞬にして、胃袋に入ってしまうけれど、子供の頃に教わったように、ご飯粒はきれいに残さず食べるようになるでしょう。

食べきれないと思ったら、口をつける前に、誰かに譲るようになるでしょう。食べたくてもお金がなくて食べれない国がいっぱいあるということを忘れて欲しくありません。東南アジアでの出来事にもっと関心をもつようになるでしょう。

スマトラ沖大地震の津波の影響で被害を受けた国々に対して、何かしましたか？

その時は何もしなかったけれど、今同じ事がおきたら、まず研修生達の顔が思い浮かぶでしょう。そして、自ら自分にできることはなんだろうかと考えるようになるでしょう。

もうひとつ、忘れて欲しくないことがあります。それは、12才のセヴァン・スズキのリオ・サミットにおけるあの伝説のスピーチである。一番大切なことは、彼女の結びの言葉である。罪を犯した加害者は、意図的であろうとなかろうと罪をつくなければなりません。環境問題、特に地球温暖化問題は、法律的に罪はなくても、我々自身も加害者の一人であるという認識に立つべきである。ならば、いままで見過ごしてきたほんの小さなことでもいいから、実行してみてもいいでしょうか？

最初は義務感から何か行動を起こしてもいいと思います。

しかしながら、償いとか義務感で実行しようとすると長続きしません。それを楽しみや喜びに変えてください。

いや、自然と楽しみや喜びが変わってきます。

断念しそうになったら、研修生たちの顔やセンターでの生活を思い出してください。

私はいつも、あのタイの子供たちの笑顔が思い浮かべるようにしてます。これからは、四国研修センターでの生活やオイスカ職員・ボランティアならびに研修生たちとの楽しい思い出を大切に、自分に何ができるのか、もう一度考えてみたいと思います。最後に研

修生達が研修を終え、もうすぐ自国に帰ってしまいますが、センターでの研修を糧に、自国での笑顔を失うことなく立派なリーダーとして活躍してくれることを願ってやまない。